



@幸せな贈り物



最後の時間

・最後の時間の意味… 小児ガン病棟で白血病と死闘を繰り広げていた十歳の少年は、抗ガン剤の治療を受け、骨髄移植を受けるなど、多くの治療を受けたのですが、ある日、状態が急激に悪くなりました。病院では「残りの時間は一月ぐらい」と言い、この話を聞いた少年の両親は、子どもを病院に置いておくのか、そうでなければ家に連れていくのか、1ヶ月をどのように過ごすのか、子どもをどのように送らなければならないのか悩みました。両親は子どもがいつも子犬を育てるのが願いだと言っていたことを思い出しました。1ヶ月ですが、子どもの願いを聞くことにして退院を決めました。病院から家に戻った子どもは、残りの1ヶ月を家族といっしょに過ごして、子犬を胸に抱いて笑いながら目をとじたということです。そして、肝臓ガンで治療を受けていた50代後半の患者にも末期状況が訪れてきました。言い出すのが難しい状況でしたが、患者に残された時間が長く持って1~2週間のような話を伝えました。がんばって闘病生活をしてきたのですが、患者は状況を受け入れることにしました。普段に会いたかった人々に電話をして呼びはじめました。別れのあいさつをするためにでした。そして、大学生の娘に尋ねました。パパは何をしてあげれば良いのかと…。娘はパパがお酒をちょっと飲んで路地の入口から歌を歌いながら入ってきたことが最も懐かしいことだと言いました。パパの歌をもう聞けなくなるなら、悲しいことだと…。パパは録音機を持ってきてくれと言いました。そして娘のために歌を歌いました。今まで30年間、末期ガン患者を世話しながら医師として最後まで患者の痛みを共感して慰め、痛みの向こう側の苦しみまで抱きしめる医療が望ましい医療というソウル大学病院の腫瘍内科センター長であるホ・テソク教授の告白が心に穏やかな感動とともに残っています。教授は多くの末期ガン患者を世話しながら、人生の最後の高貴な時間を患者が決めて味わわなければならないと話しました。しかし、抗ガン剤を処方しても、それ以上効果がなく、抗ガン剤を打ち切るのが患者のためであるのに、そのような状況を患者と患者の家族に説明することは、本当に簡単なことではな

いと言いました。患者の家族も、いつかそのような瞬間が来るだろう推察しているのですが、実際にその話に接すれば、簡単に受け入れられず、涙を流したり、失神したり、火のように怒ったりもしました。

教授が先端治療法に劣らず、今まで20年間に続けて関心をもっている部分が「臨終の質」に対する部分です。末期ガン患者の臨終過程で心肺蘇生術など「無意味な延命治療」は苦痛であるというのが教授の立場です。事実、患者の家族は最後まで最善を尽くして延命治療するのが道理と思うのですが、患者の立場では苦痛を受ける機械的な時間だけを延長させる側面があると言いました。ホ教授は、韓国で一年に約18万人が慢性疾患を病んで死亡するのに、その患者の中で臨終直前に心肺蘇生術や人工呼吸器を付けて死亡する患者が3万人を越えると言っています。教授は「毎年3万人以上の患者が人生最後の大事な時間を正しく持つことができずに行くという意味」と話しました。「普通、死の5段階を否認、怒り、妥協、ゆううつ、受け入れというのですが、韓国の保護者は患者がこのような過程をみな経る機会さえ与えません。むだな希望の中に苦痛だけ体験して死を迎える患者が多いということです。医師として当然、いのちを守ってあげたいのですが、それが不可能な時は残っている人生の大切さを守ってあげることも重要です」と言いました。

ホ・テソク教授が常に胸に刻んでいる格言があるのですが「To cure sometimes,relieve often,comfort always.」ということばです。解説すれば「医師が完治できる患者は多くない。ときどき、患者の問題を解決することはできる。しかし、患者の苦痛を減らしてあげることは医師が努力すれば常にできる」という意味です。教授は「年を取るほど医師が患者の痛みに共感して慰める役割がどれくらい重要なのか悟っている」と言いました。

・新しい時間の意味… 優秀な人も、愚かな人も、地位の上下を問わず、すべての人間は一度だけの時限付きの人生を生きていっていることをよく知っています。そして、その一度だけの人生の中で、人間は幸せを求めて、もがきながら生きていきます。ところで、そのような苦闘と関係なく、人間は不幸

のドロ沼に陥るようになります。いったい、なぜそのようなのでしょうか。聖書は、その根本的な原因と解答を提示してくれています。人間の目に見えない霊的な暗やみ存在であるサタンの働き、その策略の結果で、神様を離れて永遠な不幸と苦しみの中に落ちなければならなかった人間の実存を聖書は明らかにしています。今日も、サタンという霊的存在は、人間を不幸の苦しみの中に陥れていきつつあります。そして、サタンが願う目的は一つであることを聖書は明らかにしています。「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです…」

(ヨハネの福音書 10:10)

しかし、神様は人間の不幸を望んでおられません。むしろ、人間に向かった神様の心を聖書はこのように語っています。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(エレミヤ 29:11)「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」(民数記 6:24~26) 神様は自ら人間と永遠にともにいることを願っておられます。そして、どんな環境の中でもすべての人間の生活を幸せと勝利の道に導くことを願っておられます。神様の子どもになった人間の祈りに答えてくださり、神様が与えてくださる力と能力で人生を生きていくことを願っておられます。神様の子どもになる瞬間から、今まであなたを運命の中に閉じ込めて失敗させた悪いサタンの勢力に勝てる権威を与えることを願っておられます。また、私たちがいるすべての現場に主の御使いを送って保護して、祝福の門を開けることを願っておられます。そして、この世を離れる最後の時間に、むしろ永遠なはじまりができる天国の国籍を与えることを願っておられます。その道がイエス・キリストを信じることです。どんな環境であっても、神様との出会いは、永遠の幸せを保証される新しいはじまりを私たちにプレゼントしてくれます。それが聖書の約束です。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。(マタイの福音書 11:28-30)

キリストの職務＝

預言者 祭司 王

釈迦、ソクラテス、孔子、イエスこの四人を地球上の四大聖賢だと言います。釈迦は、かつて人生の生老病死と百八の煩惱に対する答えを探しに出て大きい悟りを得て B. C. 483 年に亡くなる前に、弟子たちに残した涅槃頃で、人間自ら解決できない三つの不能を告白しました。ソクラテスは、B. C. 399 年に毒杯を飲んで死ぬ前に、弟子に「クリトン、私はアスクルレオピスに鶏一匹を借りたよ。君が忘れないで借金を返してくれるように」と遺言を残したのですが、この話は、ギリシャ医術の新人アスクルレオピスにソクラテス自身の苦しんでいる人生をいやしてくれるように要請したものだとして解釈されています。孔子は論語で告白して「天に向かって犯した罪は、どこに向かっても祈ることができなくて、許されない」と言いました。釈迦、ソクラテス、孔子の一生がこの世の人間が持っている生老病死と苦しみを最もよく理解して答えを見つけるためにもがいた真実の人間の象徴だったら、聖書はなぜイエスをキリストと語っているのでしょうか。

聖書は、この世に生きる人間がなぜ生老病死と百八の煩惱に苦しめられなければならないのか、その理由を明らかにしています。その理由は、神様を離れた原罪、罪人として受けなければならないのろいの運命、とうてい勝てないサタンの働きに捕われた人生であるという事実です。そして、この問題を一気に解決して下さると約束された方がキリストであり、このキリストの職務を果たすためにこの世に来られた方が「イエス」なのです。イエスという名前は「ご自分の民を罪から救う者」という意味です。(マタイの福音書 1:21) このイエスが十字架で死んで3日後に復活され、地球上のどんな人間も解決できなかった道を開かれました。①預言者-人間の生死災い祝福を治めておられる創造主である神様に会う道を開いてくださいました。「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』」ヨハネの福音書 14:6 ②祭司-とうてい抜け出すことができない罪とのろいと生年月日による運命、運勢から解放される道を開いてくださいました。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」ローマ人への手紙 8:1~2 ③王-目に見えない理解できない霊的な問題と生きていけば受けなければならないくり返される苦しみ^の根源であるサタンのすべての権威を完全に打ち砕く道を開いてくださいました。「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」(ヨハネの手紙第一 3:8) イエスが十字架に死なれたとき、このように宣言されました。「完了した」(ヨハネの福音書 19:30) その方が今日あなたを招いておられます。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたか。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。(黙示録 3:20)

神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様。私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放して下さったキリストであると信じます。いま、私の中に入って来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子どもの 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン



わたしは 罪人ですか

このごろ、青少年の問題が社会問題になって、大人たちの悩みが国家的に進行している。しかし、こういう問題は、最近だけの問題でなく、古代社会から今日に至るまで続いている現象だ。時代ごとに普遍的に現れることなので、いっしょに研究してみなければならない時代の宿題だ。ある青年がいたが、お母さんの切なる教えを無視したまま墮落して外国に逃げて、そこで私生子を出産するに至った。それでも彼は一度陥った誤った道から元に戻る余裕もなく、手綱が切れた小馬のようにずっと楽しみでもない快楽を追って、やみの中を走っていった。そのようなある日、道を歩いているときに、垣根の後ろから子どもたちの遊んでいる声が聞こえてきたが「読んでみろ!読んでみろ!」ということだった。恐れの中で、その青年は家に帰って、友だちが置いて行ったパウロの書簡を広げて、どこでもよいと広げたが、目がつく所にこういうみことばがあった。「夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」(ローマ13:12~14) その青年はその場でひざまずいて、自分が自ら自由だと思ったすべての愚かな考えを下ろして、自分は罪人であることを告白した。自分がどれくらい光から遠くにいて、やみの子どもとして生きるということがどれくらい苦しいことかを発見して、光に進むことを望んだ。回復する過程が大変だったが、その青年は果敢に振り切って立ち上がった。彼は彼の経験を土台に、後ほど〈告白〉を記録したが、彼がパウロ以後に神学を集大成したアウグスティヌスだ。その裏面には自由とあるが、外れた道でさまよいながら苦しんでいるアウグスティヌスの

ために祈った母モニカの涙の祈りがあった。母の切実さが、疲れていた青年を正したとすれば、今日、私たちがのがしてしまった正しい家庭による教育で青少年問題の答えを見つけなければならないだろう。目的をおいて走って行く一人一人の人生で、私たちはみな自由だと感じる。自然法の枠で犯罪者ではないと思うが、人はそのような倫理的な罪によって罪人に規定されるのではない。それは、公共の秩序のための共同体が定めた法の枠であって、それが本質ではない。罪人は罪があるしかなく、罪の結果が与えられるしかない。これを結論から推論すれば、罪の結果は聖書が知らせている死だ。だれでも死ぬなら、その人には罪があるということで、結局、罪人だということだ。今、罪が現れていず、死なないで存在しているといっても、その人はすでに地から根こそぎ抜かれた木が枯れているように結果があるようになるのだ。ときには、私たちの人生で罪の認識や失敗まったく感じられないのに、本来の罪の証拠は現れる。神様の網は粗雑に見えても、その人生の網を抜け出した時代や人は、一つも存在しないのが歴史の証拠だ。理由のない恐れで圧迫しようとするのではなく、結果として現れている明らかな答えを提供しようとするのだ。この世にキリストが来られたことは、地球に観光しにきたのではなく、人生で解決できない絶対的な問題、すなわち、人生が罪に堕ちて永遠な死にあってるところから、まことの自由と解放を得るようにしようとするのだ。自分が罪人であることを認めなくては、死を避けることができないということは、すなわち、罪を避けることができなかったということなので、残念だが自分が罪人であることを確認することになるのだ。

チョン・ヒョングク(福音コラムニスト)

*相談したい方はこちらまでどうぞ